

<Q15> 総科生についての印象は？(他学部生のみ)

- ・一般的な教養だけ身につけて、将来何になるのか? ・恵まれている ・暇そう
- ・個性的な方が多いようで・・・
- ・奇人・変人の集合体 ・バカが多い
- ・何をやってるのかさっぱりわからん
- ・悪いえば寄せあつめ、良いえば幅広い知識を持っている
- ・バレンシアオレンジ
- ・非常に興味ある学問をやっている学部の学生だと思います
- ・ダサイ、気持ち悪い、醜い
- ・「総合科学」ってどっちつかずのこもりじゃないの? よくわからんというのが本当だけど
- ・まともに勉強しとる者が少ない
よくしゃべり、よく眠る
- ・女がいるので大変良い(工学部)

将来の流動性に培ける総科生

集計結果を振り返ってみよう。まずQ1においてさっそく総科と他学部との違いが顕著に現われてくる。Q1の質問の「総科」のところを「あなたの所属学部」として、他学部生に聞いたところ、ほとんどの人はやりたいこと好きなことがその学部にあるからだと回答しているのに対し、総科生は「総合科学」に対する漠然とした憧れや今後の道の広さなどもけっこう理由としている。Q1をQ2に関連させて考えてみると、他学部生は明確に将来を見据えているのに対し、総科生は種々雑多、特に女子の未定が目立っている。総科生には総科特有の『流動性』が感じられるようだ。

まとまった自主性に富み・・・

Q2において、「自主的」「まとも」「軽さ」などの項目に注目してみると、総科の特徴がわかるようだ。他学部より「満足している」結果になったことは、非常に喜ばしいことだろう。

貪欲な知識欲はあるが・・・

Q7で総科生のトップが「読書」、2位が「勉強」というのも非常に興味深いことである。他学部の「サークル活動」「遊び」とははっきり対をなしている。総科生には、様々なことに対する貪欲な知識欲があるのだろう。また、「何をやるうとー」の問いに、「やるうと思っていたのだが・・・」のかげりのニュアンスが感じられるようにも思われる。

講義もよくサボリ・・・

Q9では、Q15で他学部生の「まともに勉強しとる者が少ない」との御指摘通りの結果が出た。他学部生によく知られていないのでは・・・

Q15では総科生をよく知らないという意見が割合に多かった。学部間の交流があまりないようである。とくに、総科生には、「総科ファミリー」的な意識があるのだろう。総科に対する誤解も多い。他学部との接触、相互理解が必要だろう。

総科生の印象としては、文学部を除いては、概して印象が悪い。(これからは文学部と仲良くしよう!) 期待はずれのとまどいを越えて・・・

Q13の質問は、問いが漠然としていたことや、特に④進路、進学など、現時点では答えにくい面もあって、良い資料が得られたとは言い難い。しかし、いずれも、入学後、「期待に反して現実は・・・」といったとまどいを呈している。入学前は未知の部分の多い学部であったため、期待度が高かったこともあるだろうが、学校当局、そして誰よりも僕たち自身が、真剣に総科のあり方について考えていく必要があるだろう。

総科には、主に男子は(A)専攻の学問分野を、女子は(B)総合的人間形成、(C)学際領域、(D)入学後の学問分野を期待して入学してくるようだ。特に、(C)の学際領域への女子の期待度は高かった。(E)進路、進学については、最初からあまり限定的に期待していないようだ。学際的・総合的な研究を主とする総科の特色からいって、「学ぶ」ために入学してきたと解釈すればよいことなのかもしれない。

総科生の自覚を・・・

以上のように「総科」を大まかに探ってきたが、「総科」の様々な特色を生かすのも、殺すのも、僕たち総科生一人一人にかかっているといえるだろう。



テニス・ブーム

テニスは楽しい
陣崎克博

「Tennis crazy では自慢していましたが、先生が現われてからは負けそうです。ストレートの強打を防ぐ手は何かといつも考えているのですが、仲々特効策がありません。」教育学部の羽生さんから頂いた今年の年賀状である。流石に心理学の先生、ウマイことをおっしゃると感心し恐縮しチョッピリ悦に入って、スクラップ・ブックに貼りつけた。その下には、工学部の浜村さんと組んでHTC杯争奪戦(昨年10月)の予選リーグで優勝したときの写真



が添えてある。

◇ ◇
ゲームの世界では、多かれ少なかれ皆テングである。書き出しの部分にかいま見られるように小生とて例外ではない。さてその小生をはじめとして、総合科学部の自信に満ちた教職員が昼休みにはコートに満ちあふれる。All-round playerでミスが少なくクロスのスロークに牙えを見せる式部さん、ヴォレーとサイドを抜く球が抜群の山田さん、ゆるいサーブを強打のエイズで返しコートマナーが最も陽気な松本さんの三人は、年長組で貫禄十分である。川村さんなど保健体育の諸先生、天野実さん、内山さん、学務第一係長の高井さんは、その昔勇名を馳せた伝説上の人物であるが、あまり昼のコートに姿を見せられないので、サッパリ実力のほどが解らない。紙上を借りていつか胸を借りたいと挑戦しておこう。

素姓がよく解っていてやっぱり一番上手なのが荒井さん、それに次いで洗練されたマナーの小村さん、昨年の式部杯優勝者山口さんと岡崎さんであろう。キビキビとした近代のテニスのために生まれてきたような爽やかな水島さん、確実さと運動神経の鋭さと手首の返しの強さで随一の江口さん、ヴォレーと頭腦的プレーと評論家の素質で定評のある森さん、フ

ォームの良さと鋭いボールで群を抜く福居さんと木本さん、シューアで独特のヴォレーで得点を重ねる内海さんと松田さん、基本に忠実でノーブルなコートマナーの甲斐さん、月間進歩賞もので研究心旺盛の武田さんと福嶋さんなど多士済々である。それに他学部の教職員、学生諸君の有志が加わって、昼休みのコートは正にけんけんごうごうしかも春風駘蕩、白球交錯して百花繚乱たる状況である。

その技術的平均水準は決して高いとは言えない。



しかし成長期の学部の燃焼するエネルギーの背後に潜むフラストレーションを解消し、式部学部長のスローガン「和気あいあい」の実現に大きな役割を演じていると申して過言ではあるまい。

◇ ◇
小生、40代の半ばから数年間、胃腸の調子が悪く、朝起きにくく、いつも体がなんとなくだるくて仕事への意欲も湧かず、元気がない状態が続いた。大病院での精密検査も異常なく、運動不足ですよと言われても、悪循環でなかなか運動に踏み切れないでいた。それが、なにが端緒であったか、一昨年の11月テニスを再開することになったのである。再開後5日目にしてギックリ腰になっても挫けず、今日まで続けたのが良かった。今やテニスのおかげで快眠・快便、すこぶる体調が良く、気分爽快で、なにをやっても面白い。最近は人生が楽しくて楽しくてしかたがないのである。

60になっても70になっても続けるぞと、今日も「冷水」と冷やかされながら、一球一打に精神を集中し、テニスの心技向上が研究の促進に寄与し、研究の進展がテニスの進歩に貢献する相互作用を確信し、気品あるアマ・プレイヤーとなることを目指して、コートのかなかを駆けずり回っているのである。

(英米研究・教授)

あおぞらのなかま
森 利一

最近、テニスが全国的ブームだそうで、またわが総合科学部でも教官の愛好家が増えている。この現象をとらえて編集子が文章を書くようもとめてきたが、正直なところ弱った。“下手の横好”ということしかとりえのない私には指折り数えて、30名近い教官が白球を追うようになっている事実



に改めて、驚かされると同時に、決して若くはない人々をしてコートに誘い出している魅力はなんなのかと思えばし考えてしまったのである。さらに、この依頼には皮肉もこめられているのではな

かろうかとの邪推さえ浮かぶ……い年をしてコート狭ましと動きまわって……などと。
私は研究室がコートに面していることもあって、軟庭部の部員たちの力動感あふれるプレーを観る機会が多い。その激烈たるプレーぶりはみていて実に楽しく、さわやかである。そのうえ、いろいろと勉強になる。
私は私の無様なプレーぶりをみることはできないが、教官仲間のプレーには力強さとかたくましとかの表現が当てはまることはまずない。若い諸君には、もたもた、やっているようにみえるかもしれないが、お互い結構、真剣にやっているのである。技術の秀れたプレーヤーならば、ラインぎりぎりねらったということから判定がきわどく、もめることがあるが、われわれの場合でも判定がもめることがある。たゞし、ごく稀な場合をのぞいて、たまたまボールの落下した位置がきわどかった、という偶然の所産としてである。なかには、上達著しい人もいて、意志と技術が結びついているけれども、私などは意志とボールの行き先きとは時の運という“ひどさ”である。それでも、本人は大真面目なのである。



そんな私の、そしてわれわれのテニスを巧みに正当化できるキャッチフレーズはないものか。そんな矢先に小さな新聞記事が目にとまった。それはジョ

ギングとランニングの違いを説明したものであった。この記事によれば、日本人は多分に両者を混同しているという。私にしてから、ジョギングということばをカーター大統領の訪日を契機に知った次第で、「とぼと歩く・のろい」という語意をもつ jogging から、大統領はゆっくり走るのだろう位に思っていた。しかし、アメリカでは明確に区別されていて、ジョガーは「健康増進を目的にし、人との触れあいを期待して走る人」であり、ランナーは「走ることにそのものが目的の人」である、とのことである。

この伝でいけば、われわれのテニスはジョギング流ということになる。私なりに改めて考えてみると、硬式テニスのおもしろいところは、正確なショットとインパクトに心掛けるならば、非力な人でもそれなりにプレーができるところにあるといえよう。いゝかえると、軟式テニスは若者のもつ素晴らしいパワーがないとついていけないであろうが、硬式テニスは相手のパワーとスピードを巧みに転じうる技術を身につけるならば、対応できるスポーツである、と思われる。硬式テニスのこうした特性が多くての教官に伝えられ、また実際にやってみて、今日の盛況につながっているのではなからうか。それは健康維持にも役立つことは間違い

ない。
シングルスは体力の消耗を急速にまねき、かつコートの利用効率という点からも、なじまず、ダブルスが好まれている。まさに、われわれは、ランナーではなく、ジョガーではないか。題して、「ジョギング流テニス」にしようかとも考えた次第である。

もっとも、ゲームで勝ち負けを競うのも楽しいことであるが、「ジョギング流テニス」が人との触れあいを期待する以上、マナーがまず、まもらなければならない。そして、触れあいを期待される品格がめざされねばならないだろう。“隗より始めよ”

ということばの苦さをかみしめて筆を擱く。

1980. 6. 2

(社会文化研究・助教授)

< シリーズ・その11 >

学問のススメ

量子力学の学習について

松田 正典



今日、量子力学は、物理学研究のみならず、量子化学、分子生物学更には地学の微結晶学的研究等々、多方面の基礎科学研究に重要な役割を果している。学際領域の研究の発展は、一つは社会の時代的要求に応えるという形でうながされるのであろうけれども、一つは純粋に研究上のモチベーションによって起る。殊に基礎科学研究の学際領域においては、より詳細な探求は微視的な観点からの研究という形で発展して来た。勿論、情報科学による統計的研究の発展ということもあるが。量子力学が微視的な世界を記述するダイナミクスとして研究の理論的基盤となることは今後一層深まって行くことだろう。従って、化学者のポーリング博士のように、量子力学を充分使いこなす生物学、地学の研究者を育てるということは、研究者養成の一つの課題であろうと思われる。総合科学部こそこの課題に応えねばならないし、応え得る体制が既に作られている。しかし、レンガを積み重ねるように、力学—熱学—電磁気学—物理数学—量子力学と順を追って教育して行く従来のカリキュラムを、生物系化学系の学生に覆習させることは当抵できることでない。

京都大学の類人猿の研究の報告に、海水で芋を洗うといった従来その集団に無かった新しい行動(知識)をあみだし、その群の慣習として定着させる機縁を作るのは、常に子猿のグループだとあった。

理論研究は相当に熟練を要するので、自分のマスターした理論及び計算技術とはきわだって違う理論等には、どんな頭のやわらかい者でも極めて強いアレルギー反応を生じ安い。新しい理論、従来のものときわだって異なる計算技術等をいち早く

吸収し活用し始めるのは若い研究者である。この点人間の場合も、複雑な新しい情報の吸収には、若い頭脳が必要とされるのであろう。量子力学の覆習についても、従来のカリキュラムの型にとられることなく、いきなり量子力学を学習し、必要に応じて理解に不足する基礎知識の学習を補って行くという型での取り組みが可能だと思われる。授業を担当する者には、これははなはだやりにくい感があるが、学生に“やる気”さえあれば必ずある程度の所までは行けるだろう。途中で脱落されてはいたしかたない。

ちなみに量子力学の学習に最低限必要とされる基礎知識は、振動波動論、解析力学の初歩、物理数学の一部(線型微分方程式及び行列式の固有値問題、球関数、円筒関数)である。

以上は私の授業を受けている学生の求めに応じてしたためた私の所感であるが、終りにもう一言書き添え度い。量子力学の学習は、完成されたものゝ学習に止まらず、量子力学の完成への途上に次々と創出されたすばらしい着眼とそれを具体化する驚く程巧みな実験技術の積み重ねを学ぶことが大切だと思われる。学際領域の研究を志す人には特に意義があると思う。何しろ1オングストローム(10^{-8} cm)のオーダーという肉眼には遠く及ばない微視的世界の構造を、限られた少い情報を下に定性的に推求し定量的観察の手法をあみだし実証に基づいて理論を組み立てて行った研究の歴史なのであり、これを前期量子論というが、人間の英知がふんだんにちりばめられ、科学研究を志してこれを学ぶ者の胸をふくらませて止まないものがある。私は、環境科学研究コースの共通必修科目に“前期量子論”を入れるべきだという意見を従来から持っている者である。

(基礎科学研究・助教授)

